



PRESS RELEASE (2026/08/07)

救急車利用問題を、「総合知」で問い直す

インサイトレポート『大学が救急車利用問題を考える』の公表と福岡救急医学会（9月）での発表

福岡市の約 50 万件の救急出動データを学生が分析

未来社会デザイン統括本部（シンクタンクユニット/医療・健康ユニット）がとりまとめ

九州大学未来社会デザイン統括本部シンクタンクユニットデザイン実践グループと医療・健康ユニット未来医療グループは、救急車利用問題をテーマに、学内の多くの部局が参加する研究会を重ね、「総合知」として検討してきました。これは、大学がすべき総合知の実践の一例です。**福岡市の約 50 万件の救急出動データを学生が分析**し、救急医療・情報学・経済学・法学・デザイン学を横断する多様なアプローチから論点を構造化。さらにサイエンスカフェ等での市民との共同作業から生まれた数十のアイデアを 8 領域に整理しました。分析からは、院外心停止後の生存率・社会復帰率が全国上位という医療の質の高さ、市民 AED・CPR 実施率の高さに表れる地域に関わる市民の厚み、そして出動件数が増加するなかで高い稼働密度を支え続ける行政・消防の姿という、福岡市の構造的な強みなどが見えてきました。決定的な解決策（キラーソリューション）を示す段階にはまだありませんが、論点とアプローチの整理を終え、福岡の可能性を抽出することができました。今後は企業等との連携も視野に、具体的な解決方法の検討及び来年度の教育プログラム化へと進みます。

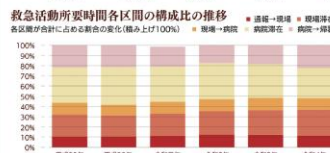
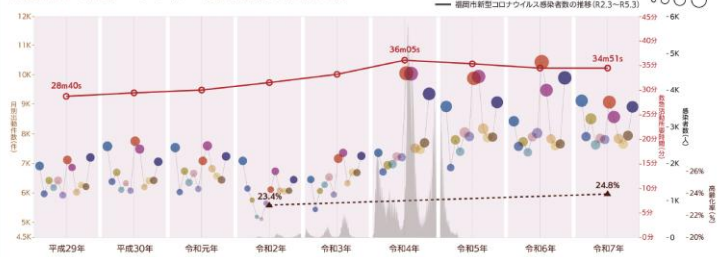
本活動の成果の一部を、**9月12日に九州大学病院キャンパスで開催される福岡救急医学会**で学生・教員が発表します。レポート（全 170 ページ/全 8 章+資料編・予定）の**詳細やデータ集は特設ウェブサイト**（<https://ogata-design-office.jp/99/>）をご覧ください。

本活動は、未来社会デザイン統括本部シンクタンクユニットデザイン実践グループ／医療・健康ユニット未来医療グループを中心に、学内複数部局による研究会、学生

による約 50 万件データの分析、サイエンスカフェ等での市民との対話・共創を通じて行われました。



福岡市の救急出動件数・救急活動所要時間・高齢化率・新型コロナウイルス感染者数の推移比較



行政 救急搬送者の政 福岡市 負担プロファイル(リーダー)



救急車利用問題を、「総合知」で問い直す。

「論点整理と多様なアプローチの抽出」

——インサイトレポート『大学が救急車利用問題を考える』

未来社会デザイン統括本部医療・健康ユニット未来医療グループとシンクタンクユニットデザイン実践グループは、救急車利用問題について、**市民・行政・医療現場が共に考えるための知的基盤を整えること**を目的としたレポートを作成しました。**サイエンス・カフェ等の市民との対話を通じ、また福岡市の約 50 万件の救急出動データの分析と、救急医療・情報学・経済学・法学・デザイン学を横断する「総合知」のアプローチを通じて、件数増減や有料化の是非といった議論を超えた「論点の構造」と「議論可能な選択肢のマップ」**を整理しました。本レポートは特定の政策を推奨するものではなく、事実の可視化と各主体が共創的に検討するための**共通の参照枠**を提供するものとしています。

KEYWORDS 福岡市 50 万件 救急データ分析／福岡モデル仮説／論点アプローチ／厄介な問題／サイエンスアゴラ、サイエンスカフェ／総合知／対話・共創

■ 本レポートの主な内容

① 論点・方向性の整理——専門家と非専門家、当事者とは誰か

▶救急要請における課題や問題を、構造化して提示

重症の見落としは生命に直結する一方、軽症搬送は医療リソースの大きな負荷になる——両者は同じ基準では量れない。多様な方向性から、このリスクを整理し、利用議論の前提として提示しました。行政データの有効性・可能性が示された一方で、行政と大学など分析機関の連携体制の構築の必要性も確認できました。

② 福岡救急モデルの可能性提示——福岡市の現状を可視化

▶50 万件データから見える、福岡市救急の構造的特徴を可視化

福岡市は院外心停止後の生存率・社会復帰率が全国上位、市民AED実施率も高い。一方で出動件数は増加傾向、稼働密度も高い。「救命成果」と「救急負荷」が併存する福岡の構造を現時点では理想的なモデルとして整理し、その背景にある市民参加文化との関係を考察しました。リソースの有効利用や解決に向けての遷移の方法も重要であることが確認できました。

③ 市民・学生の 75 アイデアを 8 領域へ——市民・学生・非専門家による意見を構造化

▶議論可能な選択肢を、判断支援から地域共創まで網羅的に整理

サイエンス・カフェ、研究会、授業、シンポジウム等で創出された75のアイデアを「予防／判断／搬送／再帰」×「個人・心理／制度・構造」のマトリクスに集約。判断支援、教育、代替アクセス、データガバナンスなど、社会的議論の素材として網羅的に整理しました。アイデアそのものだけでなく、市民・学生の問題意識の高さがわかります。

④ 救急車問題から、厄介な問題を考える総合知の教育へ

▶これまでの成果を更に発展させ、学生や市民等に向けた教育コンテンツを提供していきます

幅広いアプローチで物事を見る力・客観的に分析する力・可視化する力など芸術工学部での救急車問題を考える授業を来年度全学学生・一般向け公開講座・高専生インターンシップなどに展開していきます。本プロジェクトのプロセスを幅広く共有していくことで、総合知のアプローチを具体化していきます。

■ 本レポートの位置づけ —— 大学の役割

① 政策提言ではない「議論の土台」の提供。

本レポートは特定の政策を推奨するものではありません。データ分析・論点整理・選択肢の構造化を通じて、市民・行政・医療がそれぞれの立場で考え判断するための、共通の参照枠を整える役割を担うことを目的としています。

② 福岡市救急の「事実」を、データから可視化。

約50万件の出動データを基盤に、生存率の高さ、市民参加の厚み、出動件数の増加と稼働密度の上昇など、福岡市の救急に関する多面的な事実関係を、印象や体感ではなく実データに基づいて整理しました。

③ 議論可能な選択肢を、網羅的に整理。

市民や学生・行政から得た75 のアイデアを8 領域に分類しました。判断支援、教育、代替アクセス、データガバナンス、地域共創など、議論の素材を包括的にみるきっかけにします。多様で様々な当事者からのアイデアですが、行政・医療・市民の自分事としての対話を作ります。

■ 本レポートへのQ&A

Q. なぜ大学が、行政が所管する「救急」の問題を扱うのか？

A. 救急利用問題は、医療・医学・経済学・心理学・行動科学・デザイン学・行政学を横断する「総合知」の領域と考えます。大学は中立的な知の拠点として、データ分析・問いの構造化・評価アプローチを考えます。本レポートは行政の所管事項に踏み込むものではなく、市民・行政・医療の対話を支える知的基盤を提供することを目的としています。

Q. 本レポートは、有料化や条例化をめざしているのか？

A. 本レポートはまずは特定の政策に対する推奨や反対の立場をとらないアプローチです。判断支援、代替アクセス、教育・リテラシー、データガバナンスなど、議論可能な多様な選択肢を構造化して提示するものであり、最終的な政策判断は行政、医療現場、市民の対話により形成されることが良いと考えています。

Q. 「厄介な問題 ウィキッド・プロブレム」とはどういう意味か？

A. 単一の解決策では収束しない、複数の要因が絡み合う社会的課題を指すデザイン学の概念です。救急車利用問題は、件数の増減や有料化の是非といった一方向の議論では捉えきれず、市民の判断行動・不安心理・医療資源・制度設計が相互に影響しあう構造として捉える必要があります。救急車の問題だけでなく、世の中にはこのような様々な複雑な問題があります。それを考えていく方法の一つが総合知であると考えています。

■ レポート構成（全 170 ページ／全 8 章＋資料編）（予定）

- | | | |
|------------------------|----------------|----------------|
| 00 このレポートはなにか／論点とアプローチ | 04 代替サービスの再設計 | |
| 01 救急利用問題を問い直す | 05 実装に向けて | 06 トランジションデザイン |
| 02 事実と科学的基盤(50 万件分析) | 07 モデル化と展開 | 08 大学の役割 |
| 03 市民判断と行動設計 | 語彙集・アイデア集・データ集 | |

■ 詳細は特設ウェブサイトへ <https://ogata-design-office.jp/99/>

8/1 大橋キャンパスオープンキャンパスで学生が発表

9/12 病院キャンパス 福岡救急医学会で学生・教員が発表